

Refugee

is... Vol.2

特大号のまとめ



未来を予見するためには、過去を、その物理的、社会的そして政治的文脈と照らし合わせて分析することが重要です。私たちは日本における国際人道支援、特に難民支援における今後の方向性を予測するために、まず日本がその分野で過去にどのような役割を担ってきたのかを理解しようとするところから始めました。その過程で「日本の経験に共通する特有なスタイルまたは『レシピ』はないか」との問いかけが出てきたのです。

戦後日本における海外での人道支援の経験は、ベトナム戦争後の1980年代に本格化しました。日本の「レシピ」は、アジアの中の日本という地理的な位置づけをきっかけに芽生えたのです。それは、難民や避難民、戦争によりトラウマを抱える人たちを支援しようと奔走する個人や小さな組織による草の根的な活動から始まりました。これは私たちにとって重要な「発見」でした。というのも、それは顔の見える日本の活動であり、「公式な」日本のものとは別の、世界を良くしようと努力する一人ひとりの日本人のものであったからです。このことから私は、個人の責任や自己犠牲・献身といったものが「日本のレシピ」における最初の重要な要素となるように思います。

1990年代に入ると、日本は国際舞台において急速に存在感を増すようになりました。料理において「シェフ」の存在が重要であると同様に、人道支援の分野で、日本から緒方貞子氏や明石康氏のような国際的影響力を持つリーダーが登場したことにより、日本のレシピは急成長したと言っても過言ではないでしょう。緒方貞子氏のような著名な日本人が、国際的レベルで人道支援の必要性を訴えかけたことは、ひるがえって多くの日本人、そして日本政府に対して大きな影響を与えたことと思います。しかし一方で、1990年



2006年2月14日バンコク(タイ)で開催されたワークショップ:人道行動における「日本のレシピ」はあるか?より

代の日本のレシピは、財政支援を中心とした間接関与であり、積極的に政策立案には参加しないオブザーバー的役割に終始したともいえます。

それが1990年代末に重大な転機を迎えます。時の総理大臣小渕恵三氏が、日本は「人間の安全保障」という枠組みを通して、最も弱い立場にある人々を支援し、難民やその他弱者に対し持続的平和と安定をもたらすことを主眼に置いた協力を行うと公言したのです。このことにより日本は、財政支援のみならず国際社会に対し、ひとつの重要な概念的枠組みを提供しました。

以上をふまえて、いま日本が将来に向けて必要としているのは、豊かな国としての財政的な資源を元手に、人間の安全保障の概念・アプローチに基いた人道支援プログラムを実施できる多くの人材であるように思います。また新たな今世紀は、国際的な政策や戦略策定の分野においても、日本の声がより反映されることを期待します。

個人の努力が日本の支援を象徴した1980年代初頭から、2006年のいまに至るまでの間に、日本では力強い市民社会が育ち、国内外で活躍するNGOが出現するようになりました。またこうしたNGOや市民社会の活動を支援する政府のメカニズムも形成され、面的な広

がりを見せています。加えて、日本の平和維持活動や、JICAといった機関を通じた持続的開発支援、さらに平和構築支援に対する一連の取り組みも、現在そして将来の日本のレシピを構成する重要な要素として忘れるわけにはいきません。

日本を取り囲む環境の変化により、日本の人道支援におけるレシピも25年前と比べて複雑化・多様化しています。しかしながら、基本的な価値はその当時から変わっていないとも思います。それは、国際的な人道支援分野に日本がのりだした当初の日本人一人ひとりが抱いていた責任感やコミットメントに、今もなお支えられているのだと思う一方で、時代を越えてそのような価値が引き継がれていることを認めることもできます。そしてそれを構成する個々の日本人こそが、人道行動における日本の最上のレシピの主材料だと考えています。



国連難民高等弁務官
(UNHCR)
駐日事務所
代表

ロバート・ロビンソン